

# 冷戦期情報戦の一背景としての1930年代上海

進 藤 翔太郎

## 0. はじめに

本稿は、1931年上海でリヒャルト・ゾルゲ (Richard Sorge) によってリクルートされた、GRU (ソ連情報総局) で最も大きな役割を果たしたエージェントの一人であるルト・ウェルナー (Ruth Werner, 1907-2000) に焦点を当てることで、1930年代上海で活動したゾルゲを中心とするインテリジェンス・ネットワークを、冷戦期情報戦の一背景として捉えることを目的とする。

ルト・ウェルナーは、本名はウルズラ・クチンスキー (Ursula Kuczynski) といい、ベルリンにて、中産階級家庭で生まれ、10代のころから共産主義運動に従事する。

ウェルナーは、1930年夫ルドルフ・ハンブルガー (Rudolf Hamburger) とともにモスクワを旅行、ソ連の情報活動のために働くことを説得され中国に移る。1931年、アグネス・スメドレー (Agnes Smedley) を通じてゾルゲに紹介され、上海ではゾルゲグループの一員として活動する。ゾルゲに Sonya というコードネームを与えられて以後 GRU では Sonya の名前で非合法活動を行うことになるが、ゾルゲの推薦によって、モスクワで無線電信機、マイクロ写真、暗号技術の訓練を受け、その後、満州、ポーランド、スイスでスパイ活動を行うことになる。イギリスでは、原爆スパイ、クラウス・フックス (Klaus Fuchs) のケース・オフィサーとして、英米の原爆計画及びその技術に関する情報をソ連に伝達し、そのインテリジェンス上の功績から、二度も赤旗勲章 (Orders of the Red Banner) を授与される。さらに、当時の MI5 長官ロジャー・ホリス (Roger Hollis) スパイ説の根拠の一つとして、ホリスはウェルナーとの関係性の有無が疑われることになるが、MI5 のホリスへの調査の結果から明らかになったのは、ホリスの1930年代の上海における左翼人脈がゾルゲグループを含むということであった。

従来のゾルゲ事件研究では、上海におけるゾルゲネットワークの存在が冷戦期にホリススパイ説の根拠として挙げられたことに関する記述がなかった。

本稿は、1930年代のゾルゲグループを中心としたインテリジェンス・ネットワークを、冷戦期情報戦の一背景として把握するにあたって、まず、第一章ではウェルナーのイギリスにおける諜報活動の功績の概観を記述し、第二章ではウェルナーとホリスの間に何らかのつながりがあるのではないかという疑惑が生じた背景にある、1930年代上海にてホリスの有していた左翼人脈を、ゾルゲグループとりわけウェルナーとの関わりという観点で記述を行う。その上で、第三章

では、ウェルナーの1930年代の上海でゾルゲにリクルートされたことがその後のウェルナーのインテリジェンス活動の基底となった経緯を記述する。

### 1. イギリスにおけるルト・ウェルナーの諜報活動について

ウェルナーの果たした役割として、今日大きく取り上げられることが多いのは、上海でのゾルゲグループとしての活動ではなく、原爆スパイとして知られるクラウス・フックスのケース・オフィサーとして、英米の核研究に関する進捗情報をソ連が得ることを可能にした点をはじめとする、イギリスにおける諜報活動においてである。

1932年、キール大学在学中にフックスはドイツ共産党に入党し、共産主義学生グループの指導者となり、ヒトラーが政権を獲得した後、1933年にイギリスに亡命、イギリスにあるドイツ共産党の地下組織に参加し、主として党の宣伝に関わる活動などを行う。

フックスは、ブリストル大学、エディンバラ大学にて物理学の学位を取得するが、ブリストル大学では、ソビエト文化交流会というフロント組織の会合に参加するなど、共産主義への信奉を強く抱いていた。

1940年5月のフランス敗北に伴い、イギリス当局によって敵国民の疑いで拘束されるも、安全保障上の脅威がないとして、1942年、フックスはイギリス国籍を申請し、認められる。1941年5月、同じくドイツからの亡命者であった物理学者であり、イギリスの原爆計画における重要人物であったルドルフ・パイエルス (Rudolf Peiels) の採用により、フックスは原子爆弾の設計と製造という極秘計画チューブ・アロイ・プロジェクトに参加することとなる。フックスは、チューブ・アロイ計画の重要性を認識し、ウェルナーの兄、ユルゲン・クチンスキー (Jurgen Kuczynski) に接触する。

ウェルナーの兄、ユルゲンは当時、ドイツから亡命しイギリスで亡命していたドイツ共産党活動家の指導者として活動していた。フックスは、ユルゲンにソ連との連絡を依頼し、ユルゲンはフックスの意向をソ連に伝える<sup>1)</sup>。2009年に公開された元KGB対外諜報官アレクサンドル・ヴァシリエフ (Alexander Vassiliev) がソ連崩壊直後に国外に持ち出したKGB文書館の筆写資料である「ヴァシリエフ文書」には次のように書かれており、ウェルナーと兄のユルゲンの果たした役割が明記されている。

ユルゲン・クチンスキー (イギリスにおける我々の非合法基地の指揮を行っている 'Sonya' の兄) の手筈で、F (クラウス・フックス) は1941年秋イギリスにて、我々の工作員である大使館付陸軍武官書記 Cde. Kremer (クレメル) によってリクルートされた。ユルゲン・クチンスキーは当時ロンドンに住んでおり、イギリスのドイツ共産党の古参職員である。クレメルはユルゲンを公式のコネクションで知っていた。Fはイデオロギー的信念に基づいて活動に同意し、報酬は受け取らなかった。我々のために活動している間、Fは、ウラン分裂

の理論的計算や原子爆弾を含むたくさんの貴重な資料を提供した。

1942年7月、クレメルがソ連に出発したため、Fとのつながりが一時的に途絶えてしまう。1942年10月22日、‘Sonya’が我々にした報告によると、彼女の兄ユルゲン・クチンスキーの話では1942年7月Fという名の物理学者は、Johnsonと名乗るソビエト大使館の陸軍部局の代表と連絡が途絶えたとのことである。また‘Sonya’の報告によれば、ユルゲン・クチンスキーの提案でSonyaは既にFとのコンタクトを確立して、Fから資料を受け取っているとのことであり、Sonyaは継続してFとのコンタクトを維持し、資料を受け取るべきか否かの指示を仰いでいる。我々の指示のもと、SonyaはFとのコンタクトを維持…<sup>2)</sup>

上記のヴァシリエフ文書（ウェルナーはコードネーム Sonya として表記されている）からわかるように、ソ連がフックスから原爆に関する資料を得る上で、ウェルナーは大きな役割を果たしていた<sup>3)</sup>。

イギリス側はウェルナーとフックスの諜報活動をどの時点で把握していたのだろうか。インテリジェンス研究の大家、クリストファー・アンドリュー（Christopher Andrew）によれば、ウェルナーがフックスのケース・オフィサーであることをイギリス情報部が把握したのは、KGBの記録担当者であったヴァシリー・ミトロヒン（Vasili Mitrokhin）が1992年にイギリスに亡命し、KGBに関する膨大な複写文書（いわゆる「ミトロヒン文書」）によってであるとしている<sup>4)</sup>。しかし、ウェルナーがイギリス情報部に気づかれることなく、兄のユルゲンや、上述のクレメルと協力してフックスをエージェントとして獲得し、ソ連に情報提供を行うことが可能であったことに対しては、いくつか疑問点が指摘されている。

上述のクレメル（Kremer）とは、シモン・ダヴィドヴィッチ・クレメル（Simon Davidovich Kremer）を指し、1937年初から大使館付陸軍武官としてロンドンのソビエト大使館にいた人物であるが、クレメルに対しては1940年に既にGRUのスパイであるという情報をウォルター・クリヴィツキー（Walter Krivitsky）がMI5に提供していた。

ウォルター・クリヴィツキーは、1938年までヨーロッパを担当するGRUのハグ特務機関長として活動し、スターリン粛清が自身にも及ぶことを恐れ、1937年にフランス、翌年の1938年にアメリカに亡命、回想録を刊行しスターリン粛清の内実を暴露して国際的な反響を呼び、1941年でワシントンにて謎の死を遂げた人物である<sup>5)</sup>。

クリヴィツキーは1940年1月19日にMI5の要請によりロンドンに到着し、MI5に対し、自身の亡命理由として、自身がスターリン粛清の対象となっていることを説明するが、MI5による3週間以上に及ぶ訊問の中で、ソ連がイギリスの中に複数の情報源を有していることを明らかにし、上述のクレメルをGRUの監督者として活動しているとして警告を行った。この時、クリヴィツキーはMI5の提示する写真ではっきりとクレメルが赤軍第四本部のスパイであることを話しており、MI5は既にクレメルがスパイ活動を行っている人物であることを認識していた<sup>6)</sup>。

クレメルによるフックスのリクルートが成功したことを考えると、クレメルに対する監視をはじめとして何らかの対応がとられていたと考えることは難しく、仮に政治的な配慮があったとしても、この段階では、1941年のヒトラーによるソ連侵攻はまだ生じておらず、説明がつかない。

加えて、ウェルナーは1950年にフックスが逮捕された後、東ドイツに戻るが、それまでの間にイギリス当局がウェルナーのスパイ活動に関して把握していなかったことに対しても疑問が指摘されている。

ウェルナーの最初の夫であるルドルフ・ハンブルガー (Rudolph Hamburger) は、1930年代ウェルナーとともに上海に渡り、ゾルゲグループに加わった人物である。GRUはウェルナーに、イギリスでの諜報活動を行えるよう、イギリス国籍を取得させるため、1939年10月にルドルフとウェルナーに離婚を指示し、1940年2月23日レオン・ブルトン (Leon Beurton) と結婚させている<sup>7)</sup>。その後、ルドルフは1943年4月イランにてスパイ活動を行っていた間、アメリカに逮捕されるが、その際ルドルフはアメリカに自分がソ連のために活動しているエージェントであることを認めている。このため、アメリカはイギリス当局にルドルフの身柄を引き渡し更なる尋問を求め、MI5に対しルドルフとウェルナーの関係を調べ直すよう報告している<sup>8)</sup>。また、1944年7月24日にはイランで逮捕されたルドルフに関する件で、アメリカ大使館員が、ルドルフの前の妻であるウェルナーとその子供について詳細を求める手紙を送っている。その手紙に対するイギリス側の返答としては、1944年8月10日に返信を送り、兄のユルゲンを重要な共産主義者としているものの、ウェルナーについては、子供たちを育てることに献身的で、共産主義へのシンパシーは抱いてはいても、前の夫のルドルフとは全く接触を維持していないというものであった。これに対し、FBIはウェルナーが前の夫ルドルフと遅くとも1942年12月までは接触を有しているとホリスに対して反論しており、1946年8月25日にはアメリカ大使館の情報担当員がルドルフに関する件でウェルナーに対し聞き込みを行ってほしいとの要請を行うも、ホリスはその必要性はないとして拒否している<sup>9)</sup>。

## 2. ロジャー・ホリスの1930年代上海における左翼人脈

ゾルゲ事件に関しては、戦後どのような影響を及ぼしたかについては、アメリカと日本の場合に言及されることが多い。

しかし、実際にはゾルゲ事件が戦後に及ぼした影響という意味において、前述で見たようにソ連に原爆の技術に関する一連の情報を提供したことを含め、おそらく最も混乱の影響を受けた国がイギリスであった。本章では、ゾルゲ事件がイギリス情報部内に大きな影響を与えた経緯について記述する。なお、前述のように、混乱の背景にあったのは、ホリスの上海におけるゾルゲグループにつながる左翼人脈であり、こうした左翼人脈がウェルナーやゾルゲグループとの深い関連性を持っていたことを主張するため、人物説明を脚注ではなく本文で記述する。

警察庁長官や中曽根内閣の官房長官を歴任した、後藤田正晴は、1965年5月警察庁次長となり、

情報関係の外遊を行う。同年9月に3週間ほどイギリスに滞在することになるが、その時の経緯について、後藤田は回想録の中で、次のように記述している。

本部でね。MI5とMI6です。片方が防諜で片方が諜報ですね。当時、行く前にイギリスから注文がありました。それは、日本のゾルゲ事件の資料を下さいという。(中略)そして、何でいま時こんなことをやるの、と言ったんだ。これは第二次大戦のさなかの話ではないですか、と。いやまだ残ってる、というんだ。どこに残っているの、と言ったら、上海だといったね。根が残っているんですよ。その追求を我々はしているんですよと言ったな<sup>10)</sup>。

1930年代上海におけるゾルゲを中心としたインテリジェンス活動は戦後のイギリスにとって、どのような影響を及ぼしたのだろうか、何故戦後にイギリスは上海におけるゾルゲグループの調査を行う必要性があったのだろうか。それは、戦間期から戦後にかけてイギリスの外務省や情報機関といった国家中枢に浸透したソ連スパイ網、いわゆるケンブリッジ・ファイブの摘発という文脈の中で調査が行われた可能性が高い<sup>11)</sup>。

戦後のイギリスによってゾルゲ事件がイギリスにおけるソ連スパイ摘発の文脈の延長線上で扱われたことを示しているのが、MI5でソ連側スパイを摘発する最高責任者の一人であったピーター・ライト(Peter Wright)の回想録である<sup>12)</sup>。当時、グゼンコ事件<sup>13)</sup>を契機としてイギリス情報部内部にソ連のスパイがいることが疑われていたが、ライトはグゼンコ事件で得られた供述の中のイギリス情報部内のソ連スパイElliを、当時のMI5長官ロジャー・ホリスであると疑い、調査の延長で、ホリスがスパイであるという証拠を探し出すため、1920年代から30年代にかけてのホリスの交友関係についても調査を行う。その交友関係にコミンテルンにつながる人物が存在することに疑念を抱いた結果<sup>14)</sup>、ホリスの交友関係に関するライトの疑念は、1930年代上海にまで及ぶこととなる。

MI5長官となるロジャー・ホリスは、オックスフォード大学在籍時、学位を取得できず退学し、1927年中国に赴き、ジャーナリストとしての活動を開始する。翌年、BAT(ブリティッシュ・アメリカン・タバコ・カンパニー)<sup>15)</sup>の広告部門に就職。1930年には北京に転勤するも、その後も頻繁に北京から上海を訪れる。1936年に病気が理由で中国での仕事を止め、イギリスに帰国し、MI5に就職、1956年にはMI5長官の地位にまで上り詰めることになる人物である。

ライトの回想録から確認できることであるが、ライトによって、1930年代上海時代のホリスの交友関係について調査が行われ、その交友関係はウェルナーを含むゾルゲグループと密接な関係を有する者であった。そのために、ライトは、ウェルナーとホリスには何らかの関係があるのではないかという疑念を抱いたことが窺える<sup>16)</sup>。

ライトの調査により、ホリスが上海時代に親しく交際していた人物として、アグネス・スメドレー、アーサー・エヴァート(Arthur Ewert)の二人が明らかとなった<sup>17)</sup>。また、この他に、ラ

イトが調査していた時期には分からなかったことではあるものの、上海時代の左翼人脈として、リウィ・アレイ (Rewi Alley) の名前も指摘されている<sup>18)</sup>。

以下では、上記三人の人物が持つ上海におけるゾルゲグループとの関わりを中心に、記述する。

#### アグネス・スメドレー (Agnes Smedley)

アグネス・スメドレーは、表向きフランクフルター・ツァイトゥング紙 (Frankfurter Zeitung) のジャーナリストとして上海では活動していたが、コミンテルン及び GRU のために働く実質的なスパイとして活動し、上海におけるゾルゲグループの形成に極めて重要な役割を果たした。ウェルナーがゾルゲグループの一員になるきっかけを作ったのもスメドレーである。ウェルナーは中国に来る前のベルリン時代にすでに、1929 年に出版されたスメドレーの著作「大地の娘」(Daughter of Earth) を読み、スメドレーに心酔。ウェルナーは中国に渡った後、すぐにスメドレーとの接触を試みる。スメドレーに接触した際、ソ連のために何か活動したいという希望を打ち明け、ウェルナーはスメドレーによってゾルゲに紹介され、ゾルゲグループの一員となる。スメドレーはウェルナーの他にも、陳翰笙や張文秋<sup>19)</sup> などの中国人や、後に東京におけるゾルゲグループで中心的役割を果たすことになる朝日新聞記者の尾崎秀実をゾルゲに紹介して、ゾルゲグループに加わらせるなど、ゾルゲグループの拡大に最も大きく貢献した人物である。ウェルナーにとっても、スメドレーは唯一無二の親友として回想録では描かれており、ウェルナーはスメドレーを通じ、陳翰笙、宋慶齡、尾崎秀実、魯迅らと交友を深めている。ウェルナーとスメドレーは、ヌーラン事件を巡って友人関係に亀裂が入ることにはなるが、ウェルナーは無線連絡や無線電機の設置のための訓練を受けるために派遣されたモスクワ先でも、スメドレーと再会し、毎朝スメドレー、ボロジンと朝食をとったり、スメドレーの代わりに、MORP (International Red Aid, 国際革命運動犠牲者救援会) の印刷機関のための記事を書くなど、極めて親密な関係を有していた<sup>20)</sup>。

#### アーサー・エヴァート (Arthur Ewert)

アーサー・エヴァートは、ドイツ人共産主義者で、ドイツ共産党員である。1923 年には、第 3 回共産主義インターナショナル執行委員会 (ECCI) にドイツ代表として出席。汎太平洋労働書記局 (PPTUS) の古参活動家としても活動しており<sup>21)</sup>、1932 年から 34 年にかけて、中国共産党へのコミンテルン代表として中国へ派遣されていた<sup>22)</sup>。この時期のエヴァートの役割については、中国共産党内で生じた毛沢東排除の動きに対し、毛沢東を中国共産党内で影響力を保てるようにするものだったという指摘がなされており、周恩来の提案によって即座に毛沢東に「病気休暇」を与えられることになる寧都會議の際には、毛沢東が紅軍のポストから解任されたことに対し、モスクワに電報を打ったと言われている<sup>23)</sup>。

その後、モスクワに呼び戻されたのち、アメリカ、ブラジルへと派遣され、ブラジルの左翼クーデターの準備にとりかかるも、クーデター計画は失敗に終わり、逮捕されるに至った。

1966年MI5のライトはホリスに対して尋問を行った際、上海でホリスと住居をともにしていた当時イギリス陸軍将校であったアンソニー・ステーブルス(Anthony Stables)を訪れ、ホリスについて話を聞いている。ステーブルスは1930年代北京でホリスとは少なくとも一年以上アパートの部屋をともにしたことを認めたとうえで、当時、スメドレーなどの左翼たちとの交流を有していたことを憶えており、以下のようにエヴァートとホリスとの交友関係にも言及している。エヴァートは何度かステーブルスとホリスのアパートの部屋を訪れたが、「国際的社会主義者」であるエヴァートとホリスの関係はステーブルスにとって理解に苦しむものであった。というのも、上記のスメドレー、アレイの場合、表向きは、ジャーナリストであったり、作家であったために、当時のホリスのジャーナリストとしての交友関係の範囲として説明がつくかもしれないが、エヴァートの場合は、ドイツ共産党でもECCIにおいても既に重要な役割を果たしていた人物であったことを考えると、上海でジャーナリストとして活動し、BATで広告部門の仕事についていたホリスがエヴァートと複数回会う必要性について疑問が生じるからである<sup>24)</sup>。

さらに、ウェルナーとの関係性で言えば、ウェルナーの回想録中に、ウェルナーは中国でエヴァート夫妻と親しい関係にあり、ゾルゲの許可を得た上で、ウェルナーはスメドレー、エヴァート夫妻の3人で、小旅行を行ったという記述が見られ<sup>25)</sup>、ウェルナーとの交流はもちろん、ゾルゲ自身もエヴァートが上海で別個の任務を受けて派遣されていたことを知っていたことが窺える。

#### レウィ・アレイ (Rewi Alley)

リウィ・アレイは、ニュージーランド人の活動家であり、ゾルゲグループのメンバーの中では、スメドレー、陳翰笙とともに地下活動の協力を行っていた。電信設備を有するボランティアの情報組織としての性格を持ったコミンテルン中国班に所属していたと言われている<sup>26)</sup>。アレイの活動はスメドレーやゾルゲグループの地下活動を側面から補助する性質を有していた。具体的には、アレイは中国語を話すことができたためスメドレーのために翻訳を行う他、国民党から逃げてきた兵士に対して自宅を隠れ場所として提供することであったが、アレイがスメドレーにとって非常に有用であったのは、アレイの持つ社会的地位によるところが大きい。というのも、当時、アレイは、上海市自治政府のために、上海市の外国人支配下にあるすべての労働条件を調査する仕事を行うなど、上海工部局の仕事に従事していたため、上海市の公用車に逃れてきた兵士を乗せ警察の検問所を無事に通過させることが可能だったからである<sup>27)</sup>。スメドレーとともに協力してかくまった代表例に、劉鼎<sup>28)</sup>、陳翰笙がおり、他にも鹿地亘の香港への脱出を計画し実行している<sup>29)</sup>。ここではウェルナーとも親しかったゾルゲグループの構成員の一人である陳翰笙とアレイ、スメドレーの協力関係について主に記述を行う。

陳翰笙はポモナ大学、シカゴ大学、ハーバード大学、ベルリン大学の各大学の学位を取得していた歴史・経済学者で、上海では、国民政府の中央研究院社会科学研究所の副所長をしていた人物であるが、地下活動という側面では、北京大学の教授であった1926年に、コミンテルンに

エージェントとしてリクルートされる<sup>30)</sup>。宋慶齡の手筈により、スメドレーの補佐役として、スメドレーが中国の政治、社会経済的状況の把握するのを手伝っている。スメドレー自身、中国国内の日本企業の繊維工場による搾取の調査は陳翰笙のサポートによるところが大きいと述べている<sup>31)</sup>。さらに、スメドレーは陳翰笙をゾルゲに紹介し、陳翰笙がゾルゲグループに加わる契機を作った。ゾルゲグループが中国人協力者を必要としていたのには、ゾルゲの所属する GRU が共産党との接触を禁止していたことが背景にあった。この点、陳翰笙は中国の革命運動に共感を有していたことは知られてはいても、まだ中国共産党員でなかったという事実は、中国共産党との直接なつながりを持たない中国人協力者を求めるゾルゲにとって好都合であったと考えられる。また、陳翰笙が流暢に英語を使うことができる中国人であったことも大きい<sup>32)</sup>。

ゾルゲグループに加わった後、陳翰笙は1934年来日し、「東洋文庫」で研究に従事する一方で、ゾルゲの支持を受け、尾崎秀実と連携して対日工作に従事する<sup>33)</sup>が、1935年に陳翰笙に危機が訪れ、その際に陳翰笙の身を救ったのがアレイであった。

1935年アメリカ共産党員でありコミンテルンのエージェントでもあるユージン・デニス (Eugene Dennis) が上海租界警察によって逮捕される事態が生じる。当時、上海においてデニスはコミンテルン極東局 (FEB)、ソ連秘密警察、軍事情報活動の面でも極めて重要な役割を引き受けており、コミンテルンの地下活動の責任者の地位にあった。このため、デニスの逮捕によって、中国共産党中央委員会の約10人のメンバーだけでなく、複数人の外国人共産主義者が一斉検挙されるに至り、ユージン・デニスの逮捕によって中国から大量のコミンテルン代表が引き上げることになる。

デニスの逮捕の影響は上海にとどまらず、東京にも及ぶ。というのも、デニスの逮捕時、ゾルゲや尾崎とともに工作活動に従事していた陳翰笙は東京で、デニスに会うこととなっていた。しかし、デニスが現れなかったことで、自身の身に危険が及ぶかもしれないと考えた陳翰笙は再び上海に戻り、スメドレーと接触する。この時、陳翰笙をかくまったのが、スメドレーとアレイであった。

当時、デニスの逮捕の影響がスメドレーにも及ぶことを恐れたアメリカ共産党書記長アール・ブラウダー (Earl Browder) は、スメドレーに対しアメリカに戻るようにとの提案を行っていたが、この提案を拒否したスメドレーはまだ上海に残っていた。

スメドレーはアレイと協力して陳翰笙をかくまった後、ソ連領事館と調整を行い、陳翰笙に金持ちの上海人のような身なりをさせて、黄浦区の港にとまっているソ連の船までアレイに送り届けてもらい、陳翰笙は1935年モスクワに到着する<sup>34)</sup>。

1936年、太平洋問題調査会 (IPR) の機関誌「パシフィック・アフェアーズ」 (Pacific Affairs) の編集長であったオーウェン・ラティモア (Owen Lattimore) が IPR の加盟国であったソ連に助手を派遣するよう要請したため、ソ連はラティモアに陳翰笙を推薦し、アメリカに派遣した。陳翰笙はニューヨークに渡り、当時モスクワに滞在中の康生の指揮の下、1936年から39年までラティモアの助手を務め、再び康生の指示で香港に活動を移す。滞米中は太平洋問題調査



会（IPR）の研究者であることと「パシフィック・アフェアーズ」の編集者であることを隠れ蓑にし、中国共産党のエージェントとして活動し、アメリカ共産党との連絡に従事する<sup>35)</sup>。

ウェルナーとの交流に関して言えば、陳翰笙が文化大革命で失脚した後、ウェルナーはジャーナリストのイスラエル・エプシュタイン（Israel Epstein）<sup>36)</sup>を通じ再会を果たすなど、上海時代にとどまらず戦後も交流を有していた<sup>37)</sup>。

アレイ及びスメドレーの果たした役割は、劉鼎、陳翰笙二人のその後の諜報活動を可能にしたという意味において、非常に大きく、単にゾルゲグループとしての活動を大きく超える影響を及ぼした。

こうした交友関係があったという事実それ自体が、スパイであることの根拠の一つとして挙げられることは、当時の上海で行われていた地下活動ネットワークの性質を考えると無理のないことであった。地下活動ネットワークの維持と拡大を担ったのは、人と人の接触そのものであった。新たな構成員の拡大、他のエージェントや機関への連絡、情報機関からの機密文書の受け渡し、といったネットワークの維持と拡大は人と人の接触によって行われていた。スメドレーのみならず、ウェルナー、尾崎秀実といったゾルゲグループの多くの構成員が、自身を通して新たなグループの構成員を獲得するなど、グループの連絡網の拡大とその維持に寄与していたことはその証左である。そのために、ホリスが当時の上海で地下活動のネットワークの維持・拡大に大きな役割を果たしていたスメドレーやコミンテルンの使者として中国共産党に派遣されたエヴァートといった人物と親しい交友関係があったという事実それ自体が十分な疑惑の材料として扱われることになったのである。

また、自国の情報機関のトップにソ連のスパイがいるという猜疑心そのものが、冷戦の産物ともいえるだろう。

その意味において、ホリスに対する調査で浮かび上がった上海時代の交友関係は、直接的にも間接的にも、ウェルナーのみならずゾルゲグループとの強いつながりを含むものであったことから、1930年代におけるゾルゲグループのネットワークの存在そのものが、戦後イギリスの情報機関内の混乱の原因となり、また、冷戦といった時代背景と密接な関係を有していた。

### 3. スパイ Sonya の生みの親としてのゾルゲ

ゾルゲグループにおけるルト・ウェルナーの活動としては、ゾルゲに対し、自宅を情報提供者や協力者との会合場所として提供、連絡係としての役割、機密文書のコピー、夫ルドルフ・ハンブルガーの友人<sup>38)</sup>をゾルゲグループにリクルートするといった活動や、左翼作家連盟への寄稿などであるが、こうした活動そのものは、同時期におけるスメドレーや尾崎秀実といったゾルゲグループの構成員と比べると、重要性は低い。しかし、その後の、とりわけイギリスにおけるウェルナーの諜報活動の成果は、ゾルゲによってグループの構成員としてリクルートされたことなしには決して達成されなかったものであった。その意味において、ウェルナーとゾルゲの

1930年代上海での出会いは決定的に重要である。

前述のように、1930年7月にドイツを発ち、モスクワを訪問した後、シベリア鉄道経由で極東方面に向かう。大連を経て上海に到着したウェルナーはスメドレーと接触し、ゾルゲに紹介されて、ゾルゲグループに加わることになるが、ウェルナーのその後の諜報活動の土台は、そもそもゾルゲが上海に派遣された背景と、彼に課せられていた任務と不可分な結びつきを持つ。

当時、上海に派遣されたゾルゲに課せられた役割は、主に、蒋介石の南京政府の政策及び軍事力に関する報告、南京政府と対立している様々な団体や集団に関する報告、GRUの中国における連絡網の再建である<sup>39)</sup>。これらの任務の背景にあったのは、1927年の蒋介石による上海クーデターであった。上海クーデターの後、広東、上海では中国共産党及び労働組合の指導者が大量に殺害されたため、GRUは中国紅軍と共産党の支配する内陸部との連絡手段を持ち合わせていなかったのである。

こうした状況を背景に、モスクワと上海間の無線連絡のためにロシアからアレックス・ボロヴィッチ (Alex Borovitch)<sup>40)</sup>、ゾルゲ、ゼッペル・ワインガルテン (Seppel Weingarten) が上海に派遣されることとなった<sup>41)</sup>。後に、東京におけるゾルゲグループの重要な一員であるマックス・クラウゼン (Max Clausen) はGRUの技術部門ではワインガルテンの同僚で、ワインガルテンを通してゾルゲグループに加わり、ゾルゲたちが上海に到着する前の段階の1928年秋ごろに中国に派遣され、1930年11月にゾルゲたちと合流するまでに既に、上海-ウラジオストック間の通信を確立し、ハルビンで活動する赤軍のエージェントのための無線装置を設置していた。このように、しばしばゾルゲ事件を考える際に忘れられがちなことであるが、ゾルゲに課せられていた当初の任務は、対日工作ではなく、中国とモスクワとの無線連絡及び南京政府の動向の調査といった中国共産党を巡る事柄であった。そして、この無線連絡の確立というゾルゲに課せられた任務そのものがウェルナーのイギリスにおける諜報活動にとって密接な関連性を持つことになったのである。というのも、ウェルナーが無線連絡や旅券偽造などを含む諜報訓練を受けることができたのは、ゾルゲのモスクワへの推薦があったからに他ならない。このいきさつについて、ウェルナーは自身の回想録の中で次のように述べている。

リヒャルトは、ソ連に戻った際、我々が「センター」と呼ぶ赤軍情報部に私のことについて詳細に報告したに違いありません。ともかくも、ポール (Paul) とグリシャ (Grisha) は私に将来のことについて話しかけてきたのです。彼らは私に、少なくとも6か月間以上モスクワで訓練を受ける用意があるかどうかを尋ねてきました<sup>42)</sup>。

回想録中の Paul 及び Grisha とは、1932年にモスクワから派遣されたゾルゲの上海でのグループ構成員であり、回想録中には Grisha はポーランド人で、写真屋を隠れ蓑に活動していた人物として描かれているように、主に暗号と写真の仕事を引き受け、モスクワに送る必要性のある文書の写真などをゾルゲに渡していた<sup>43)</sup>。Paul は本名をカール・リムといい、赤軍大佐の地位を

持った地位で、中国共産党との連絡を引き継ぎ、ゾルゲが上海を去った後の後任の人物である<sup>44)</sup>。ゾルゲの推薦によってウェルナーが派遣された施設は、OMS（国際連絡部）<sup>45)</sup>がモスクワ近郊で秘密裏に運営する特殊学校であり、この特殊学校は第8国際スポーツ基地（Eighth International Sports Base）という名を隠れ蓑に、当時ヨシフ・ピアトニツキー（Josef Piatnitsky）の補佐役を務めていたヤコブ・ミロフ・アブラーモフ（Jakob Mirov-Abramov）が運営していた。ドイツ共産党ヴィリ・ミュンツェンベルグ（Willi Muenzenberg）の妻、バベッテ・グロス（Babette Gross）によると、建物は二重のフェンスによって囲まれ、昼夜を問わずパトロールが行われるほどの厳重警戒が行われていたという。さらに、訓練設備としてはどの教室にも、モールス信号の訓練のための機器が備え付けられており、全世界の共産党の指導者から候補が選ばれ、アブラーモフ自身が面接、選定を行っていたとされる<sup>46)</sup>。おそらく、ウェルナーの推薦はゾルゲが行いピアトニツキーを通して行われたものであろう。さらに、この訓練施設でウェルナーを指導した一人が、前述のゾルゲと一緒に上海に派遣されたワインガルテンであった。ウェルナーの回想録には、ウェルナーの指導教官の補佐役がワインガルテンであったという記述が見られる<sup>47)</sup>。ウェルナーはこの訓練施設で無線技士として無線連絡の訓練やモールス信号などによる連絡方法を含む様々な諜報活動上の訓練を受け、この訓練がイギリスにおける諜報活動の成果の基底にあったことは間違いない。その意味で、ウェルナーのゾルゲグループへの加入は決定的な意味を有していた。

#### 4. むすび

戦後、アメリカはゾルゲ事件を、ソ連による非共産党員を用いた政府部門への浸透の好例として取り上げられるなど、東西冷戦の幕開けとともに、ゾルゲ事件そのものを国際宣伝の一環として用いていた。本稿では、従来取り上げられてこなかった、ゾルゲ事件がイギリスに与えた影響（もしくは混乱）という側面から、ゾルゲグループの構成員の一人であるルト・ウェルナーを取り上げた。

今回はテーマからそれるために言及を避けたが、ルト・ウェルナーの回想録は、それ自体が上海におけるゾルゲグループのネットワークの範囲について多くの示唆を与えるものである。たとえば、ウェルナーとスメドレーを通じて知り合った魯迅、宋慶齡との交友関係がそうであり、ウェルナーは魯迅がケーテ・コルヴィッツの本の出版を手伝ったり<sup>48)</sup>、左翼作家連盟への寄稿を行ったり<sup>49)</sup>など、魯迅とゾルゲグループとの関わりという面では、非常に興味深い。また、ウェルナーはスメドレーと一緒に宋慶齡を訪問し、ウェルナー一人でも宋慶齡を訪れるなど、ウェルナーと宋慶齡の交友関係も深かった<sup>50)</sup>。ヌーラン事件<sup>51)</sup>の際、ヌーラン夫妻釈放の見返りとして息子・蔣経国を帰国させるという提案を蒋介石に拒否された宋慶齡はゾルゲに会い、選りすぐりの共産党員100名を南京に送るよう要求している<sup>52)</sup>。ウェルナーの回想録の中で描かれているゾルゲグループと非ゾルゲグループの親しい交友関係はそれ自体が何らかの意味合いを有し

ていたのかもしれない。

本稿では、冷戦期にイギリスに与えた情報戦における影響・混乱という側面から記述を行った。第1章ではウェルナーの諜報活動上の成果の概略を記述したが、その基底にあったのは、第3章でみたようにゾルゲとの出会いであった。また、第2章では、ホリスがウェルナーと何らかのつながりを有していたことが疑われ、その疑惑の根拠にホリスの上海時代の交友関係が取り上げられたことを記述した。このように、ゾルゲ事件は単に東京で始まり東京で終わった第二次世界大戦期におけるスパイ事件ではなく、ウェルナーによるイギリスの原爆計画のモスクワへの情報提供や、ホリススパイ説といった冷戦期イギリス情報機関内に生じた混乱の一背景でもあった。

#### 註

- 1) John Earl Haynes, Harvey Klehr, and Alexander Vassiliev, *Spies: the rise and fall of the KGB in America*, (New Heaven & London: Yale University Press, 2009), pp. 92-93
- 2) Vassiliev, *Yellow Notebook #1*, p. 127-128, Woodrow Wilson International Center for Scholars, <<http://digitalarchive.wilsoncenter.org/collection/86/vassiliev-notebooks>>, accessed on September 15, 2014
- 3) Sonya は原爆に関する技術的な情報以外にも多くの情報提供をソ連に対して行っていたことも指摘されている。1943年に締結された、英米間の原子力兵器の共同開発に関する合意に関し、協定調印後 Sonya はわずか16日後にソ連に協定内容の詳細を無線電線機で報告した。Chapman Pincher, *Treachery: Betrayals, Blunders and Cover-Ups: Six Decades of Espionage*, (Edinburgh and London: Mainstream Publishing, 2012), p. 15-19  
 また、Sonyaの兄ユルゲンは、OSSのロンドン支部とも密接な協力関係にあった。OSSロンドン支部労働部門のジョセフ・ガウルド (Joseph Gould) からドイツ語を話せるエージェントが必要であるとの話を受け、これに対してユルゲンは、7人の亡命ドイツ人をリストアップしている。また、1944年から45年にかけてアメリカの戦略爆撃調査団 (USSBS) の分析官としても働いており、こうした活動に関しての一連の情報も Sonya を通してソ連側に情報が提供されていたと考えられている。  
 こうした背景には、OSS長官のウィリアム・ドノヴァン (William Donovan) は積極的に共産主義者を OSS にリクルートしていたことがあった。ドノヴァンは1943年にはモスクワを訪問しており、また、スペイン内戦に関わった兵士のリクルートに関しては、ヒトラーを倒すためならスターリンをリクルートするという旨の発言を行っている。Robert Chadwell Williams, *Klaus Fucks, Atom Spy*, (Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 1987), p. 49-50
- 4) Christopher Andrew, *Defend the Realm*, (New York: Alfred A. Knopf, 2009), p. 580
- 5) クリヴィッキーによる回想録は日本では1962年に、根岸隆夫による邦訳『スターリン時代』がみすず書房から出版され、1987年刊行の第二版は『スターリン時代——元ソヴィエト諜報機関長の記録』として改題して刊行されている。
- 6) Robert Chadwell Williams, *op.cit.*, p. 60  
 Chapman Pincher, *Treachery: Betrayals, Blunders and Cover-Ups: Six Decades of Espionage*, (Edinburgh and London: Mainstream Publishing, 2012), p. 76-77
- 7) Chapman Pincher, *op.cit.*, p. 118  
 Robert Chadwell Williams, *op.cit.*, p. 54
- 8) Chapman Pincher, *op.cit.*, p. 189

- 9) Chapman Pincher, *op.cit.*, p. 196-200
- 10) 後藤田正晴『情と理』（講談社、1998）、230-231 項
- 11) ライトは、1929年（回想録中では1920年と書かれているが、おそらく29年の誤りだと思われる）にゾルゲがイギリスに渡った際、誰と接触していたかを把握するため、MI6のワシントン駐在連絡官に頼んで、戦後ニューヨーク近くの神学校で生活していたゾルゲの未亡人クリスチアース・ゾルゲに事情を聴いている。ピーター・ライト『スパイキャッチャー』（朝日新聞社、1987）、453-454 項
- 12) ライトは、技師として通信傍受や電話盗聴の仕事を手掛けた後、1964年から76年までMI5でソ連側のスパイの摘発に従事し、MI5を退職後、オーストラリアに引退し1987年ニューヨークで、MI5での20年に及ぶ経験を回想録「SPYCATCHER」を出版する。この出版に対し、当時のサッチャー政権は、公務員機密保護法違反として、イギリス国内のみならず、オーストラリア、ニュージーランド、香港などイギリス連邦各国で出版差し止めを行い、ライトに対して訴えを起こすに至った。ピーター・ライト『スパイキャッチャー』（朝日新聞社、1987）
- 13) 1945年9月、ソ連の暗号通信使であるイゴール・グゼンコ（Igor Gouzenko）が、カナダのオタワで亡命する。グゼンコは機密情報へのアクセスを認められていたため、亡命時には、第二次大戦中のGRUの活動に関する多くの情報や100以上のソ連の軍事情報に関する機密文書を有していた。グゼンコは20人以上のカナダ人がGRUのエージェントとして活動していることや、当時カナダで原爆計画に従事していたイギリス人科学者アラン・ナン・メイ（Alan Nunn May）を情報源として挙げるなど、英米に大きな衝撃を与える。また、グゼンコは証言の中で、MI5内にElliというソ連のスパイであると述べている。Robert Chadwell Williams, *op.cit.*, p. 88-89
- 14) 例えば、ホリスがオックスフォード大学で親しくしていた友人のクロード・コックバーン（Claud Cockburn）は、イギリス共産党機関紙Daily Workerの海外特派員を務め、1936年から37年までコミンテルンのスパイとして活動していた。ピーター・ライト、前掲書、397 項 Chapman Pincher, *op.cit.*, pp. 68-69
- 15) BATは、イギリス情報機関にとって有用な情報源の一つでもあった。これは、BATという会社の持つ特性に起因している。つまり、BATの社員は、会社が華北、満州、内蒙に権益を有していたため、幅広く現地の情報にアクセスすることができていたからである。Antony Best, *British intelligence and the Japanese challenge in Asia, 1914-1941*, (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002), p. 8  
また、GRUは、BATが蒋介石への資金援助をしていたと考えていたため、BATから情報を引き出したり情報源を獲得することがゾルゲグループに要請されていたという指摘もある。Chapman Pincher, *op.cit.*, p. 46
- 16) ピーター・ライト、前掲書、532-533 項
- 17) 同書、396-398 項
- 18) Chapman Pincher, *op.cit.*, p. 48
- 19) ゾルゲの助手の一人で、その娘二人は毛沢東の二人の息子（劉思齊、邵華）と結婚している。ユン・チアン、ジョン・ハリデイ『マオ』上巻（講談社 2005）176 項
- 20) Ruth Werner, *Sonya's Report*, (London: Chatto & Windus, 1991), p. 106-1-7
- 21) Harvey Klehr, John Earl Haynes, Fridrikh Igorevich Firsov, *The secret world of American communism*, (New Haven: Yale University Press, 1995) p. 55
- 22) B・ラジッチ、M・M・ドラチヴィッチ、『コミンテルン人名事典』（至誠堂 1980）、88-89 項
- 23) ユン・チアン、ジョン・ハリデイ、前掲書、201、206 項
- 24) ライト、前掲書、397-398 項  
Pincher, *op.cit.*, p. 48

- 25) Werner, *op.cit.*, p. 69
- 26) 福本勝清、『中国革命外伝』(蒼蒼社、1994) 64-65 項
- 27) Ruth Price, *The Lives of Agnes Smedley*, (Oxford, New York: Oxford University Press, 2005), p. 225  
 ジャニス・マッキノン、ステイブ・マッキノン、『アグネス・スメドレー 炎の生涯』、(筑摩書房、1993) 173 項
- 28) 劉鼎は、1920年代勤工儉学運動に参加し、ドイツに留学し、ドイツで中国共産党に入党、その後、孫逸仙大学で学んだ際、モスクワにて暗号解読を学び、同じく当時モスクワに留学していた呉先清と結婚、帰国後に二人とも中共中央特科で職員として活動した。劉鼎は福建省にあるソヴィエト区に入り、特殊任務に就き、妻の呉先清は、中共中央特科から GRU に移り、上海に残った。1933 年から 1934 年にかけて国民党により福建省のソヴィエト区が壊滅したため、劉鼎は、35 年秋頃辛うじて上海に辿り着くも、1935 年春には上海の GRU の連絡網が摘発され、呉先清など職員たちは既にモスクワに退避していたため、二人は再会することができなかった。この時に、劉鼎は身を隠すためにアレイのもとにつれていかれ、アレイはスメドレー、宋慶齡とともに協力して数か月間、劉鼎をかくまっている。その後、劉鼎は 1936 年初め、北西部の西安を抑えていた満州軍閥、張学良と北方の紅軍との間の秘密連絡に従事する任務を任され張学良の筆頭副官として、36 年 5 月、張学良と周恩来の密会の場を設けた。福本勝清、前掲書、64-65 項 ジャニス・マッキノン、ステイブ・マッキノン、前掲書 198-199、203 項
- 29) 大森実、『戦後秘史 3 祖国革命工作』、(講談社、1975) 49 項
- 30) Maochen Yu, "Chen Hansheng's Memoirs and Chinese Communist Espionage," *Cold War International History Project Bulletin*, 6-7 (Winter 1995/1996), pp. 274-275
- 31) Price, *op.cit.*, p. 190, 193
- 32) 当時、言語の問題はゾルゲのみならず、汎太平洋労働書記局 (PPTUS) や極東局 (FEB) といった地下活動の指導機関にとっても死活の問題であった。地下活動に限らず、東アジア、東南アジア地域の共産主義運動では、地域の運動の担い手たちの母語が用いられる一方で、上海に派遣される西洋人の使える言語に中国語を含む者はほとんどいなかったとよい。そうした点において、ゾルゲグループにせよ、汎太平洋労働書記局 (PPTUS) にせよ、極東局 (FEB) にせよ、ネットワークのコネクターの役割を果たす現地の活動家の存在は非常に価値が高いものであった。鬼丸武士、『上海「ヌーラン事件」の闇』、(書籍工房早山、2014) 85 項  
 この点、汎太平洋労働書記局 (PPTUS) が日本との連絡を取るうえで有益であった日本人に、鈴江源一がいたことが指摘されている。鈴江源一は日本語、中国語、英語、ドイツ語、フランス語を使いこなし、加えて、日本のみならず中国の共産主義人脈を有していたためである。鬼丸武士、前掲書、86-89 項
- 33) ジョン・アール・ヘインズ、ハーヴェイ・クレア、『ヴェノナ』、(PHP 研究所、2010) 477-478 項
- 34) Price, *op.cit.*, pp. 263-264
- 35) Maochen Yu, "Chen Hansheng's Memoirs and Chinese Communist Espionage," *Cold War International History Project Bulletin*, 6-7 (Winter 1995/1996), p. 274-275
- 36) 前述のヴァシリエフ文書には、エブシュタインは 1937 年に中国でリクルートされていたことが記されている。Vassiliev, *Black Notebook*, p. 74 Woodrow Wilson International Center for Scholars, <<http://digitalarchive.wilsoncenter.org/collection/86/vassiliev-notebooks>>, accessed on September 15, 2014
- 37) Ruth Werner, *Sonya's Report*, (London: Chatto & Windus, 1991), p. 299
- 38) ウェルナーを通じてゾルゲにリクルートされた人物として、ヘルムート・ボイト (Helmuth

Woit) の存在が指摘されている。ハイデルベルク大学のトーマス・カンペンに教授によれば、ポイトは同時期に中国でジーマス社に勤務していたジョン・ラーベとは友人であり、行き来のあった関係であるという。トーマス・カンペン、「[「ワルター」ポイト — 上海における特異な実業家の痕跡」、(ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集)、第32巻、2012

ゾルゲは中国を去った後も、ポイトから得た経済情報をモスクワに送り、自身が逮捕された場合、ポイトを通じて連絡を行うようにクラウゼンに支持を与えていた

Frederick William Deakin, G.R. Storry, *The Case of Richard Sorge*, (London: Chatto & Windus, 1966), p. 79

- 39) Ibid., pp. 61-62
- 40) アレックス・ボロヴィッチは1927年、当時孫逸仙大学の学長をしていたカール・ラデックの軍事顧問に任命された人物で、ゾルゲの極東派遣に直接の監督者であった。E. ポレツキー、『絶滅された世代 あるソヴィエト・スパイの生と死』、(みすず書房、1989年)、117-118項
- 41) Robert Whymant, *Stalin's Spy: Richard Sorge and the Tokyo Espionage Ring* (London: I.B. Tarius, 1996), p. 33-34
- 42) Werner, *op.cit.*, p. 98
- 43) Deakin, *op.cit.*, p. 80
- 44) Ibid, p. 80  
J. マーダー、G. シェフリック、H. ベーネルト『ゾルゲ諜報秘録』(朝日新聞社、1967) 88-89項
- 45) OMSは、各国共産党に資金や指令を伝達するための特使を派遣する機構である。OMSの課員は伝書使で連絡し、彼らの活動報告は、世界の共産主義運動の現状についての本質的な情報資料となるものであった。
- 46) Price, *op.cit.*, p. 237-238
- 47) Werner, *op.cit.*, p. 104-105
- 48) Werner, *op.cit.*, p. 36
- 49) Price, *op.cit.*, p. 213
- 50) Werner, *op.cit.*, p. 87-89
- 51) 1931年6月に上海で東アジアの地下活動を指揮していた汎太平洋労働書記局の書記長イレール・ヌーラン (Hilaire Noulens) が逮捕された事件。
- 52) ビクトル・N. ウーソフ、「中国におけるゾルゲ諜報団の活躍 (1930-1932年) . 下」(ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集)、第14巻、2007

